

# 樋井川を活かした市民主体の川づくりに関する研究 —福岡市を流れる樋井川で実施した樋井川一斉環境調査を通じて—

福岡大学大学院 学生員○高辻伸彰    福岡大学工学部 正会員 渡辺亮一  
福岡大学工学部 正会員 山崎惟義    樋井川を楽しむ会 非会員 上菌剛司

## 1. はじめに<sup>1) 2)</sup>

福岡市内を流れる樋井川をはじめとする多くの河川は、昭和 28 年と 38 年に体験した水害を踏まえて、その対策として護岸を築き、川を直線化してきた。その結果、川は人工的な構造物となり、人々の関心を余り引き付けられない場となってしまった。しかしながら、福岡市では下水道の整備に伴って、川の水質は急激に回復し、人々も川への関心を取り戻してきているように感じられる。元来、川は多くの生物を育み、人の生活と密接に関わる場であった。また、同時に人の豊かな感性を引き出し、人と自然の関わり、暮らしや社会のあり方を発見できるすばらしい場でもあると考えられる。本研究の対象となる樋井川は平成 14 年 9 月同川支流の駄ヶ原川に約 100l の洗剤が不法投棄され、魚類が大量に死んだ事件が起こった。これを機に翌年から樋井川を元に戻し、より良い環境をつくるために検討会を重ねてきた。しかし、現段階での検討は行政主体で進められ、流域住民の樋井川に対する関心は徐々に希薄化していると感じられる。そのような状況ではより良い河川環境をつくることは困難であると考えられる。そこで、良い環境を取り戻すためには流域住民の川に対する関心と理解を取り戻すことが今後の川づくり・まちづくりの重要な課題であると考えられる。

## 2. 目的

現在、樋井川の取り組みに関して行政側の積極性はあまり感じられず、反対に市民団体を中心とした活動が盛んである。今後、より良い河川環境を形成するには住民による継続的な活動が必要不可欠と考える。そこで、本研究は市民主体で川を活かしたイベントを企画、実施することの有効性について検討する。また、市民主体のイベントとこれまで福岡市で行われた行政と市民が協働で行うイベントの比較を行うことを目的とする。

## 3. 研究手法

### 3. 1 イベントの企画・運営

#### (1) 樋井川一斉環境調査

平成 18 年 11 月 5 日に福岡市内を流れる 2 級河川樋井川を対象に、樋井川一斉環境調査を実施した。本調査は調査地点を樋井川の上流（同市南区柏原）から下流（同市城南区梅光園）計 25 地点に設定した（図 1）。次に、調査項目は水質調査、生きもの・植物観察、そしてゴミ調査を行った。ちなみに、水質調査は簡易水質分析製品を用いて COD（化学的酸素要求量）、アンモニウム、リン酸、更に水温の計 4 項目を測定した。また、本調査は、調査地点 25 地点で同時刻一斉に調査を行う。これは過去に前例がない非常に意義のある試みであると考えられる。

#### (2) 樋井川一斉環境調査結果報告会

調査結果及び今後の樋井川の将来を議論する結果報告会を平成 18 年 12 月 26 日に実施した。報告会の内容は、調査の結果報告、更に樋井川の現状について報告した。この報告会は、多くの住民に参加を呼びかけ、活発な意見交換を行うことを期待した。

### 3. 2 アンケート調査

結果報告会と同時に、参加者に対しアンケート調査を行った。アンケート内容は報告会に関すること、樋井川の現状に関すること、環境調査に関することの 3 項目を尋ねた。その結果を集計し、参加者と川との関係性を分析する。

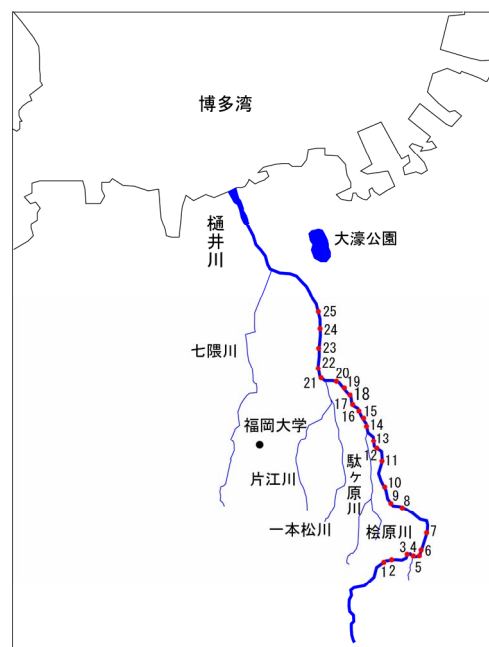


図 1 調査地点

## 4. 結果及び考察

### 4. 1 今回の調査の有効性について

樋井川一斉環境調査は、当日の参加者が100名を超えるなど市民の関心は高いことが分かった。次に、調査結果は生きもの・植物観察やゴミ調査で有意義な結果が得られた。例えば、ミシシippアカミミガメなどの外来生物、セイタカアワダチソウなどの帰化植物がどの範囲まで生息しているか分かった。ゴミ調査では、最下流に近い地点 19～23 周辺よりも地点 18 が最も多くなっていることが分かる(図2)。地点 19～23 は市民団体が毎月定期清掃を行っているのでゴミが少ないと考えられる。このように、広い範囲を調査することで、日常生活では気づきにくい流域全体の問題点を知ることができた。次に、結果報告会は開会直後から参加者の熱い議論が交わされた。参加者は日常疑問に感じていたことを専門家に聞く機会を得たことで川に関して更に関心を持ったように感じられた。

### 4. 2 アンケート結果について

結果報告会終了後アンケート調査を行ったところ図3のような結果を得ることが出来た。まず、本調査の結果報告会をどのような手段で知ったかと尋ねたところ、約8割の参加者が人から聞いたという回答であった。ここで、福岡市で行われている行政と市民の協働作業による川を活かしたイベントは、市政だよりで知ったという回答が最も多いケースが多い<sup>3)</sup>。このことから、本調査は人と人との会話を作り出すきっかけとなり、つながりを形成するツールの一つとして有効ではないかと考えられる。次に、自宅から樋井川もしくは身近な川までの直線距離はどのくらいかを尋ねたところ、6割以上の参加者が0～500mと川のそばに住んでいる人が多いことが明らかになった。この結果より川に近ければ近いほど川に関心を持つ割合が高くなると考えられる。

## 5. まとめ

樋井川一斉環境調査・結果報告会を通じて明らかとなった樋井川の問題点を住民間で活発な意見交換を行った。それにより、共通の認識をもつことが出来たと考えられる。このことから、今後樋井川をより良い河川環境にするという目標に向けて何をすべきかいうことを流域住民の中で理解したのではないかと考える。また、お互いに共通の話題を持つことで人と人のつながりを生むことができると考えられる。以上のことから、市民主体で企画したイベントは住民自ら積極的に関わることで、川に対してより関心を持つという有効性を確認することができたと考える。しかし、本調査を通じて改善すべき点も見つかった。一斉環境調査の企画段階から携わった人数が圧倒的に少なかったことで、当日も人員配置がうまくいかないなど、反省すべき点が多くなった。今後、継続的な活動を行っていくためには、行政やNPO団体、そして学校、地域住民がネットワークを構築し、連携することが必要である。

## 参考文献

1) 樋口明彦+川からのまちづくり研究会：川づくりからまちづくり，学芸出版社，2003. 2) リバーフロント整備センター編：川・人・街 川を活かしたまちづくり，山海堂，2001. 3) 高辻伸彰：川を活かした住民参加型まちづくり事業の比較分析に関する研究，福岡大学工学部卒業論文，2006.

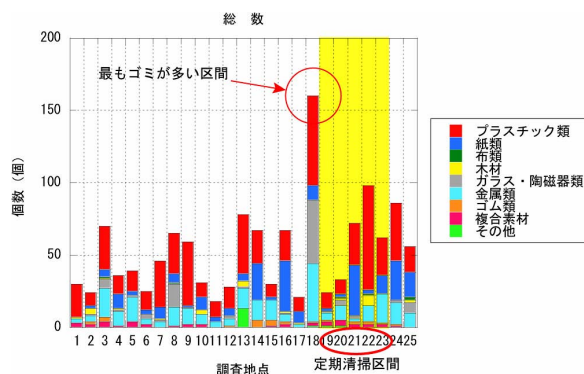


図2 ゴミ調査結果(総数)

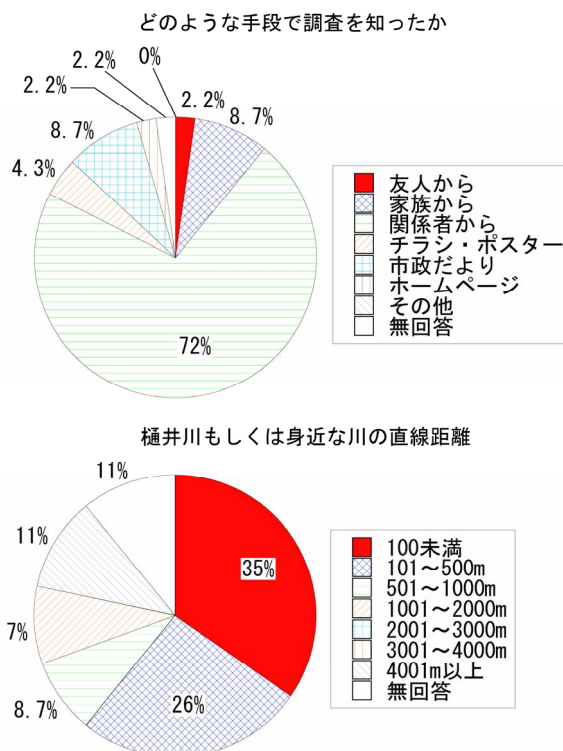


図3 アンケート結果